

施設実習における学びと体験に影響を与える要因

松 藤 光 生 浦 恭 子

Factors of the Effects of Learning and Experiences Through Practice Training in Welfare Facilities

Mitsuo Matsufuji Kyoko Ura

1. 問題と目的

平成29年、9年ぶりに改定された保育所保育指針が厚生労働省より告示された。その内容に関しては、大きな改正がなされているが、その中でも第5章「職員の資質向上」に関しては、改定前と比較しその内容がより具体的なものとなっている。保育士不足の昨今、保育士の量の確保も課題となるが、同時に保育士の質の向上も課題（本間；2012）とされており、そういった背景が反映されていると思われる。保育士の質の向上に関しては、養成段階からの取り組みが必要になると考えられ、多くの研究がなされている。それは平成28年に日本保育者養成教育学会が発足し、保育者養成についての研究が一つの学問・研究テーマとして扱われるようになったことにも示されている。保育士養成課程においては様々な専門科目の履修が必要となるが、その中でも実習科目の履修は必修となっている。また実習科目は、実際の現場での学びの中で実践力を身につけるために重要な位置づけとされ、その指導方法や実習での学生の体験等について研究や報告がなされている。保育士養成課程の実習では、保育所での実習に加え保育所以外の児童福祉施設や障害者支援施設等での実習（以下、施設実習）がある。保育士は、保育所だけでなく児童養護施設や障害児入所施設などにおいて被虐待児や障害児に対して専門的な保育を実践出来ることが求められている。しかしそういった専門性を学内の講義のみで身につけることは困難であり、施設実習は、多様な児童に対応出来る専門性を身につけ質を高めるために重要である。施設実習を経る事で施設に対する意識の変化（多田内・重永；2014、土谷；2006）があること、直接的な援助方法や利用者児の特性理解など多くの面で学びがあったこと（藤重；2014）も示されている。また山口（2007）は、実習前後で学生の自己効力感といきがい感が肯定的に変化したことを報告しており学生にとって施設実習体験が多様な面で影響を与えることが考えられる。施設実習で対象となる施設は、表1に示されるように多様な種類となっているが、学生が実

習で体験出来る施設は、多くの場合一つないしは二つとなっている。施設種によって接する児童の年齢や特徴、実習内容が異なっており、そこでの学生の体験や学びも大きく異なっていることが報告されている。土谷（2006）や石山ら（2010）の報告では施設種により学生の学びや「気づき」などに相違が見られたと報告がある。加えて松藤（2016、2017）においては実習先の施設種により学生の体験や学びが異なることが示されている。具体的には、①障害児の施設であれば障害児についての理解といたように、それぞれの施設の利用児や利用者の理解が深められること、②実習生に対しての保育士からの直接的な指導に関しては、特に障害児の入所施設で多く受けられること、③乳児院や母子生活支援施設では、保護者支援についての理解が深められることなどが示された。さらに松藤（2017）では、より多くの学生が希望通りの施設で実習を行うことが可能になる方法を取る事により実習に対しての動機付けが高まり、実習での積極的な学びや事前学習への取り組みを行う可能性があることを報告している。そのことから学生の実習を通しての学びや体験について検討する際には、学生が希望通りの実習先で実習を行ったのか、希望通りの実習体験を得られたのかを考慮する必要があると考えられる。また実習での体験を検討する際に質問紙による選択式の回答では、その体験の内容を詳細に検討することには限界がある可能性も考えられる。選択肢を設けるのではなくどのような学びや体験が得られたのかを自由に記述することで、より学生が得られた学びや体験について明確に検討することが可能になると思われる。

以上より本研究では、多様な施設種の施設実習において、それぞれの施設種による学びや体験の差異について、松藤（2016、2017）では検討が行えなかった希望通りの実習先で実習出来たことで学びや体験が異なるのかを検討することを目的とする。加えて選択式の質問による回答だけでなく、学生の自由記述の内容を検討することにより、それぞれの施設種ごとの学びや体験を詳細に検討し、質の高い保育士養成のための学生指導の知見を

表 1. 施設実習の主な実習先

施設種	概要
乳児院	主に2歳までの乳児を保護者に代わって養育する施設
児童養護施設	主に2歳～18歳の児童を保護者に代わって養育する施設
母子生活支援施設	母子に生活環境を提供すると共に自立の支援を行う施設
情緒障害児短期治療施設	情緒障害を抱える児童を入所させ、治療と共に自立の支援を行う施設
児童自立支援施設	子どもの行動上の問題、「環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ指導と自立の支援を行う施設
障害児入所施設	知的障害、肢体不自由、視聴覚障害等を抱える児童を入所させ、必要な治療、生活の支援、機能訓練等を行う施設
児童発達支援センター	知的障害、肢体不自由、視聴覚障害等を抱える児童（主に幼児）を通所させ、必要な治療、生活の支援、機能訓練等を行う施設
障害者支援施設	18歳以上の障害者を入所させ、日常生活、社会生活を支援する施設
指定障害福祉サービス事業所	18歳以上の障害者を通所させ、日常生活支援や就労支援、自立に向けた支援を行う施設

得ることを目的とする。

2. 方 法

(1) 調査対象

A大学、保育士資格取得希望の4年生、113名

実習先の決定の流れは、学生が3年時に実習先についての希望調査を実施し、それを元に担当者が実習先の確保を行った。全ての学生が第1希望の実習先に行くことが可能になるようには実習先の確保は行えないため、実習先の確保後に改めて学生に希望調査を行った。その際には「第1希望にあげている施設を希望するか」「第1希望にあげている施設種を希望するか」という事を中心に調査を実施し、可能な限り希望に合うように実習先の配当を行い、基本的に殆どの学生が第4希望までの施設での実習となった。なお第1希望から第4希望まで異なる施設種での施設名称を記入する形で調査を行っているため、第1希望の施設種であれば、記入していない施設種であっても構わないと考える学生がいることを考慮し、上記の「第1希望にあげている施設種を希望するか」の質問を設けている。この質問に「希望する」と回答した学生に関しては、希望の施設種になるように配当を行った。また若干名ではあるが、希望とは沿わない実習先での実習を行う学生もいたが、その際には個別に面談を行い学生の了解を得た。

(2) 調査内容

① フェイスシート

学生番号、実習先施設種については、実習先施設との正誤を確認するためだけに用い、分析を行う上では、個人の特定は行っていない。また実習先施設に関しては、乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設、児童発達支援センター、障害児入所施設の5グループに分けてその後の分析を行った。なおそれぞれ施設種に実習に行った人数は、乳児院26人、児童養護施設36人、母子生活支援施設13人、児童発達支援センター24人、障害児入所施設14人であった。

② 実習先の希望、体験を問う項目

実習先が希望通りであったかを問うために「実習先は、自分の希望通りに決まった」という質問に「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。また実習先での体験を問うために「①自分の希望通りの実習体験が得られた」「②実習前には予想していない学びが得られた」の2項目に「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

③ 実習前後での施設イメージの変化

実習前後での施設へのイメージの変化を問うために「①児童福祉施設に対するイメージが肯定的に変わった」「②保育所以外の施設への就職を考えるようになった」の2項目を「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

④ 利用者の理解

施設利用者の理解について問うために「①障害児に対しての理解が深まった」「②社会的養護の対象となる子どもについて理解が深まった」「③保護者支援のあり方について学ぶことが出来た」の3項目を「①全くそう思わない」～「④とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

⑤ 実習学習尺度

実習における学びの内容を測る尺度として、松藤（2016, 2017）で使用された実習学習尺度を使用した。実習学習尺度は、実習における学びや体験について問う11項目からなり、松藤（2016）により「利用者等との関わり・直接的援助」「保育士からの指導」「実習施設の理解」の3因子構造であることが示されている。

⑥ 実習での学び・体験に関する自由記述

実習における学びや体験について問うために、「施設実習の中で、特に学べたと思うこと、印象的だった体験・経験について記述してください」と提示し、回答を求めた。さらにその回答の内容から共通する内容に関して分類を行い、実習での学び・体験に関してのカテゴリの生成を行った(表2)。その上で、再度記述内容に関して、実習担当者と実習担当助手の2名の評定者により分類を

表 2. 実習体験・学びの分類カテゴリ

カテゴリ	利用児者の理解	関わり方についての理解	障害の理解	施設の理解	職員の理解	保護者支援の理解	保育技術の理解	環境調整の理解
内容	入所に至る背景や発達段階等を踏まえた利用児者についての理解	試し行動への対応や特徴に応じた個別対応についての理解	障害の特徴や障害特性に応じた対応についての理解	施設の役割や生活の流れなどについての理解	職員の役割、連携、業務内容等についての理解	保護者の理解や支援のあり方についての理解	食事介助等や部分保育・設定保育についての理解	生活環境への配慮や視覚化など環境調整への理解
記載例	複雑な背景を抱えていることが理解出来た 思春期・小学生のことが理解出来た	積極的に関わることが大切だと分かった 子どもへの伝え方が分かった	自閉症について理解出来た言葉を使わないコミュニケーションについて理解出来た	施設が家なのだと分かった子どもにとって環境の大切さが理解出来た	職員の子どもの関わり方が理解出来た他職種との連携が理解出来た	保護者と子どもの関係が理解出来た保護者への関わり方が理解出来た	食事介助の際の配慮が理解出来た設定保育で重視する点が理解出来た	子どもの居室への配慮が理解出来た視覚的に分かりやすい配慮が理解出来た

行った。2名の分類の一致率は、80%であった。

(3) 調査時期

実習終了後第1回目となる実習指導の授業の中で実施をした。実習時期が学生によって異なるため、実習終了から1か月程度経過している学生もいれば、直前まで実習があった学生もいる中での実施となった。

3. 結 果

(1) 実習先の希望、学び、体験について

「実習先は、自分の希望通りに決まった」に関しては「全くそう思わない」の回答はなく「そう思わない」の回答も5%であった。残りの95%（そう思う44%、とてもそう思う51%）の学生が実習先は、自分の希望通りに決まったと捉えていた。

「自分の希望通りの実習体験が得られた」に関しては「全くそう思わない」の回答はなく「そう思わない」の回答も9%であった。残りの92%（そう思う54%、とても思う38%）の学生が実習先で、自分の希望通りの体験が得られたと捉えていた。

「実習前には予想していない学びが得られた」に関しては「全くそう思わない」の回答はなく「そう思わない」の回答も5%であった。残りの95%（そう思う43%、とても思う52%）の学生が実習先で、自分の希望通りの体験が得られたと捉えていた。

(2) 実習先希望の認知による学びや体験の差

実習先が希望通りに決まったかどうかの捉え方により実習体験や学びに差があるかを検討するため「実習先は、自分の希望通りに決まった」の質問に「そう思わない」「そう思う」と「とてもそう思う」と回答した群で分け、その実習先希望の認知を独立変数、実習学習尺度の各因子得点、イメージ変化を問う項目2項目、利用者の理解を問う項目3項目それぞれを点数化したものを従属変数とした t 検定を行った。結果有意な差は認められ

ず、実習先が希望通りに決まったかどうかにより、実習の体験やイメージ変化などに差がないことが示された。

(3) 実習先での学び・体験の希望の認知

実習先で希望通りの体験や予想しない学びが得られたかどうかにより、実習体験や学びに差があるかを検討するため「自分の希望通りの実習体験が得られた」「実習前には予想していない学びが得られた」の質問に「そう思わない」「そう思う」と「とてもそう思う」と回答した群で分け、その実習希望体験の認知、実習予想外体験の認知それぞれを独立変数、実習学習尺度の各因子得点、イメージ変化を問う項目2項目、利用者の理解を問う項目3項目それぞれを点数化したものを従属変数とした t 検定を行った。

結果、「自分の希望通りの実習体験が得られた」の質問に対する回答による群分けでは、実習学習尺度の全ての因子「利用児者との関わり・直接的援助」($t=4.12$, $df=111$, $p<.01$)「保育士からの指導」($t=3.25$, $df=111$, $p<.01$)「実習施設の理解」($t=4.43$, $df=111$, $p<.01$)イメージ変化($t=3.93$, $df=111$, $p<.01$)、利用児者の理解の全ての項目「①障害児に対する理解が深まった」($t=2.11$, $df=111$, $p<.05$)「社会的養護の対象となる子どもの理解が深まった」($t=3.14$, $df=111$, $p<.01$)「③保護者支援のあり方について学ぶことが出来た」($t=2.51$, $df=111$, $p<.05$)において有意な差が認められた。平均値の差より希望通りの体験が得られたかどうかについて「とてもそう思う」と回答している方が、「利用児者との関わり・直接的援助」「保育士からの指導」「実習施設の理解」の学びや体験を得ており、児童福祉施設のイメージが肯定的に変化し、利用児者への理解が深まっていることが示された。(図1, 2)

次に「実習前には予想していない学びが得られた」の質問に対する回答による群分けでは、実習学習尺度の全ての因子「利用児者との関わり・直接的援助」($t=3.60$, $df=111$, $p<.01$)「保育士からの指導」($t=$

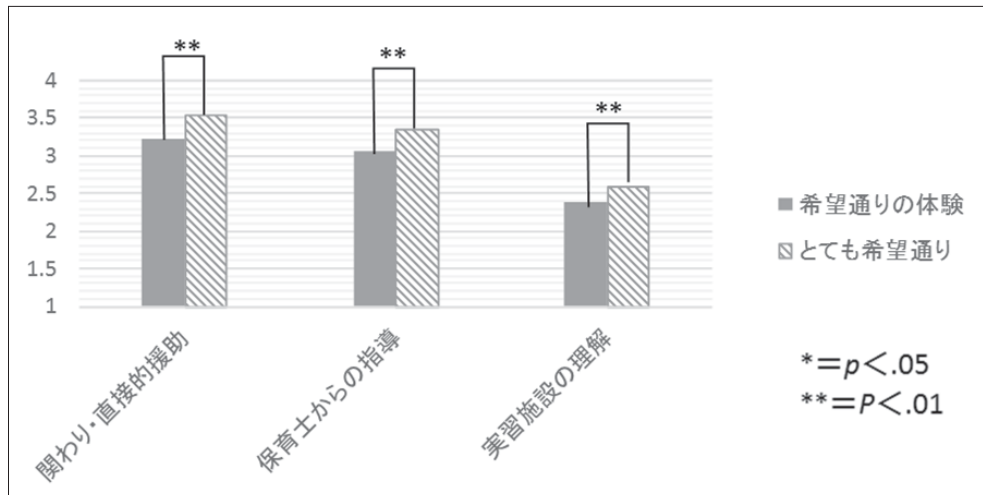


図1. 「希望通りの体験」の回答による実習での学びの差

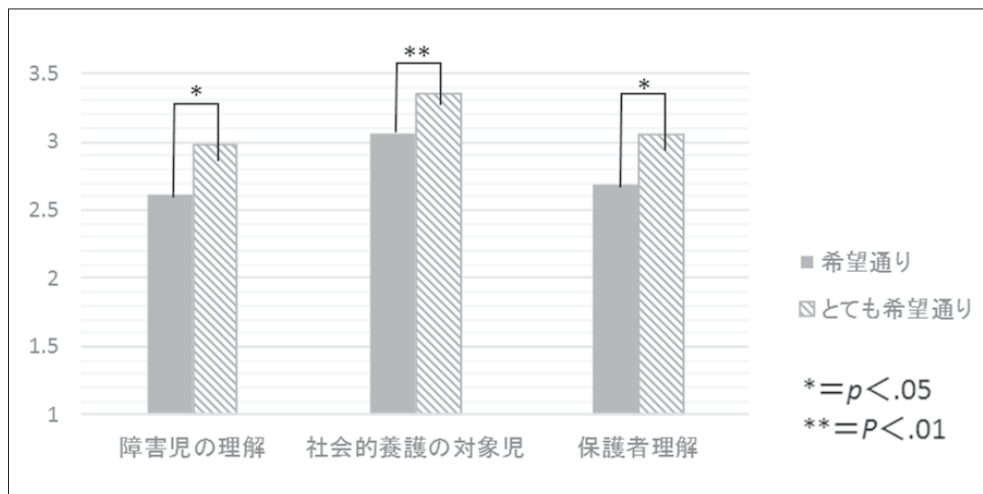


図2. 「希望通りの体験」の回答による利用児者の理解の差

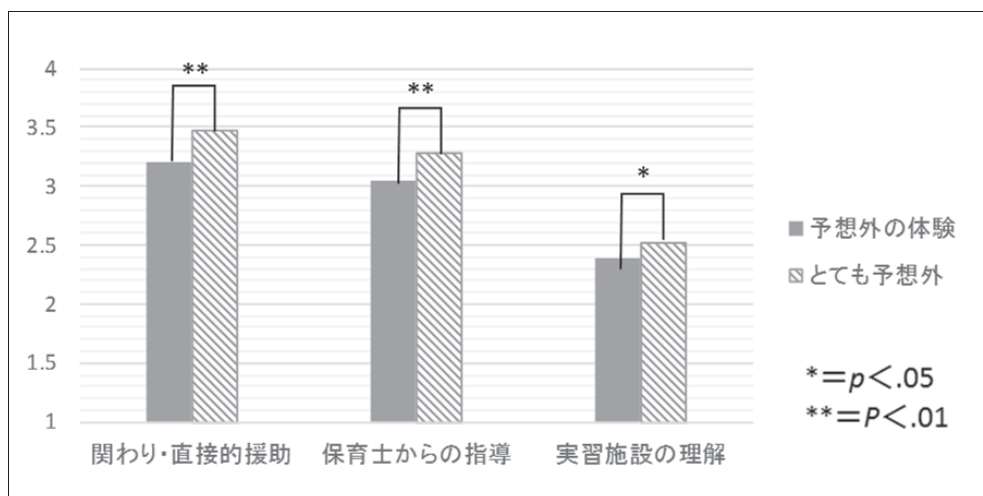


図3. 「予想外の学び」の回答による実習での学びの差

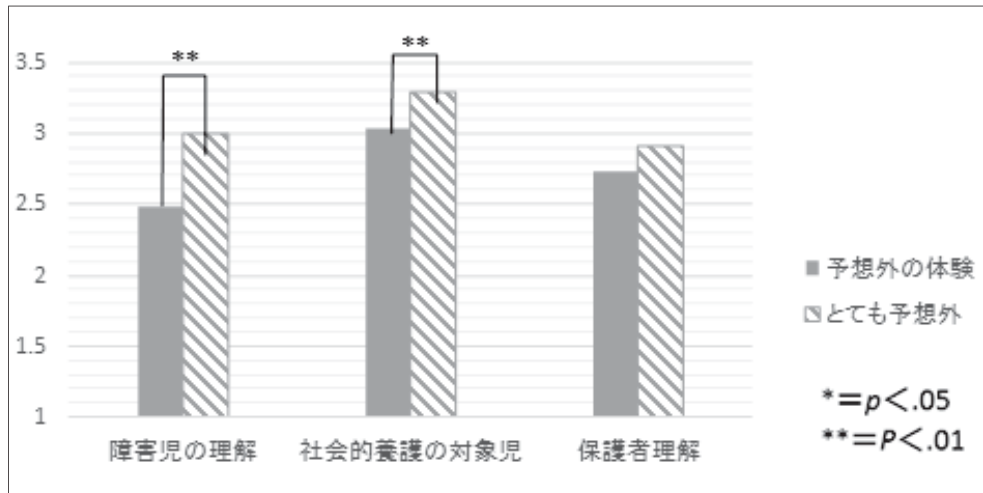


図4. 「予想外の学び」の回答による実習での学びの差

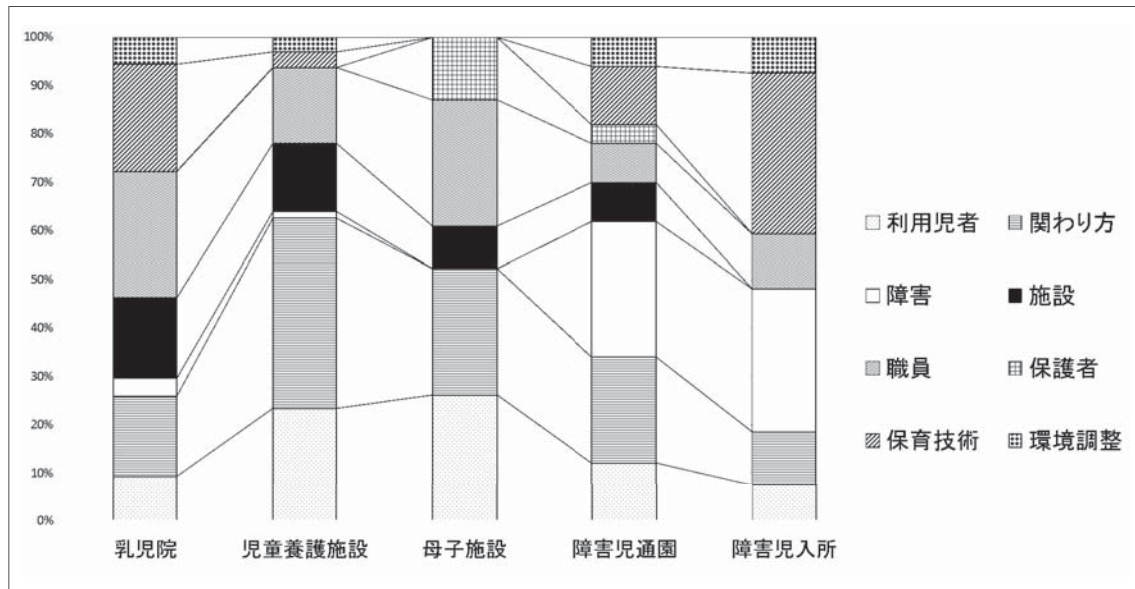


図5. 実習施設種による実習での学び・体験内容

2.77, $df = 111$, $p < .01$) 「実習施設の理解」 ($t = 2.51$, $df = 111$, $p < .05$) イメージ変化 ($t = 3.13$, $df = 111$, $p < .01$) 利用児者の理解の「①障害児に対する理解が深まった」 ($t = 3.17$, $df = 111$, $p < .01$) 「社会的養護の対象となる子どもの理解が深まった」 ($t = 2.75$, $df = 111$, $p < .01$) において有意な差が認められた。平均値の差より実習前に予想していない学びが得られたかどうかについて「とてもそう思う」と回答している方が、「利用児者との関わり・直接的援助」「保育士からの指導」「実習施設の理解」の学びや体験を得ており、児童福祉施設のイメージが肯定的に変化し保護者を除く利用児者への理解が深まっていることが示された。(図3, 4)

(4) 実習施設種による学び、体験の内容

実習施設種による学びや体験の内容を検討するため、実習での学び・体験の自由記述をカテゴリに分類にし

た。結果は、図5に示す。各施設種の特徴としては、乳児院は「職員の理解」「保育技術の理解」「関わり方の理解」が多く「障害の理解」や「保護者の理解」が少なかった。児童養護施設は、「関わり方の理解」が他の施設種と比較しても多く「障害の理解」「保護者の理解」「保育技術の理解」「環境調整の理解」は少なかった。母子生活支援施設は、「障害の理解」「保育技術の理解」「環境調整の理解」は全く無く、一方で他の施設種と比較し「保護者の理解」が多かった。障害児通園施設は、「障害の理解」「関わり方の理解」が多く、また全施設種中唯一全てのカテゴリへの記述が見られた。障害児入所施設は、「障害の理解」「保育技術の理解」が多く「施設の理解」「保護者の理解」は全くみられなかった。

4. 考 察

(1) 実習先の希望、学び、体験について

実習先が希望通りであったかどうかについては、95%が希望通りと回答しており、今回の実習先の決定方法で、殆どの学生が希望通りの実習先に行けたことが示された。加えて実習先で希望通りの実習を行えた割合、予想外の学びを得られた割合に関しても高く、事前指導等での事前学習を踏まえた希望通りの体験に加えて、そういった事前学習では想像出来ない体験や学びについても得ることが出来ていると考えられる。

上記のように殆どの学生が希望通りの実習先に行き希望通りの体験を得ているが、それを更に詳細に「そう思う」と回答したか「とてもそう思う」と回答したかに分けて、分析を行った。結果、希望通りかどうかは、学びや体験の差と関連せず希望通りの体験を得られたか、予想外の学びを得られたかどうか、実習の体験や学びと関連していることが示された。これに関しては、実習先の決定は、事前指導が始まる前に学生が実習の報告書等から情報収集し決定しているが、やはりそれだけでは情報が不足し理解が不十分な中決定している可能性が考えられる。よって実習先の希望よりも、事前学習を通して得られた知識から実習先で具体的に得たいと思っていた体験が行えたかどうか、そしてその事前学習を通して予想が出来ないような深い学びが得られたかどうか、実習の体験や学びに影響していることが示されたと思われる。

(2) 実習施設種による学びや体験の内容について

実習施設種による学びや体験の内容を検討したところ、施設種による差が認められた。以下、それぞれの施設種における学びや体験について、結果を踏まえた考察を行う。

まず乳児院に関しては、職員の理解、保育技術の理解、関わり方の理解が多く、障害の理解や保護者の理解が少なかった。これに関しては、乳児院の実習においては、職員と共に乳児の食事介助や入浴介助等に入る実習が多く、その中で職員の理解や保育技術の習得、乳児への関わり方の理解が進むことが多かったと思われる。一方、障害の理解に関しては、特に発達障害等は、乳児期にはまだ診断も出ていない場合もあり、関わりが難しい場合があっても、それを障害と捉えることがそもそも少なかったのではないと思われる。また保護者の理解に関しては、松藤（2017）で示された、母子生活支援施設だけでなく、乳児院でも保護者の理解が促せるという結果とは、異なる結果となっている。これは、今回の調査においては、自由記述での調査を行っており、乳児院にお

いて保護者支援について学びが全くないことはないが、学生にとって特に学べたこととなると、前述した職員の理解や関わり方などになるということを示していると思われる。

次に児童養護施設に関しては、他の施設と比較して、関わり方の理解の割合が高い結果となった。児童養護施設では、実習後の報告会でも、利用児からの試し行動の対応に困った、といった内容の報告が良くみられており、また一方でそのように関係形成が難しいからこそ関係が作れた際の喜び等についても報告がみられている。児童養護施設の実習においては、特にそういった子どもとの直接的な関わりや関係形成についての体験や学びが得られると考えられる。一方で保育技術の習得に関しては、母子生活支援施設以外と比較すると少なかった。実際に、児童養護施設の特に学齢期以上の児童に関しては、特に介助等が必要ではない児童も多く、いわゆる介助等を行う保育技術を習得するという機会は少ないことが考えられる。

母子生活支援施設に関しては、保護者の理解についての割合が高いことは、松藤（2016, 2017）とも一致する結果である。やはり母子が共に暮らす施設という特徴があり、保護者の理解については、他の施設よりも学ぶことが可能であることを示している結果であると思われる。加えて利用児者の理解や関わり方についての理解が高く、これに関しては児童養護施設とも似た傾向にあり、母子生活支援施設と児童養護施設では、関わる児童としては、幼児から学齢期が中心となること、被虐待児がいることなど共通して学べることがあると思われる。

障害児の通園施設では、障害の理解についての割合が高いことは当然であるが、唯一全てのカテゴリに対しての記述がみられていた。障害時の通園施設では、障害の理解を中心に幅広く学びや体験を得られると思われる。特に保護者の理解に関しては、母子生活支援施設の他には障害児の通園施設のみで記述がみられており、これは、通園時に保護者と関わることに加え、母子通園のクラスでの実習となると長時間保護者と接する機会が得られる場合があることが影響していると思われる。

障害児の入所施設では、障害の理解の高さに加え、保育技術の理解が最も高かった。これは、障害児の入所の施設では、食事や更衣の介助等、実際の介助を体験し学ぶ機会が多いということを示していると思われる。一方で、関わり方や利用児者の理解が少なく、施設の理解がみられなかった。これに関しては、障害児の入所施設の場合、障害についての理解が利用児者の理解を兼ね、保育技術の理解が関わり方の理解を兼ねている可能性が考えられる。また施設の理解がみられなかったことに関しては、障害児の入所施設は、その役割が明確であり、実

習の事前学習において十分な理解が得られていたため、実習での学びとしては出てこなかったのではないかと考えられた。

(3) まとめと今後の課題

本研究の結果、施設実習における学びや体験には、実習先が希望通りに決まったかどうかは、大きく影響せず、むしろ実習の中で希望通りの実習体験が得られたか、予想外の学びが得られたが影響を与えることが示唆された。加えて、実習の施設種により、実習で得られる学びや体験の内容が異なることが示された。実習先の決定において、可能な限り学生の希望を反映し配当を行うことは、学生のモチベーションを考慮する上で重要であると思われるが、それ以上に実習先決定後に、その施設においてどのような学びや体験が得られるのか、その施設の特徴や利用児者について事前学習の中で丁寧に指導することが重要であると思われる。さらにその際には、実習の施設種により、学びや体験に違いがあるので、それぞれの施設種における学びや体験の特徴を踏まえた指導を行うことにより、学生がより具体的に実習での学びや体験にイメージを持って、実習に臨み、深く幅広い学びや体験を得られる可能性が考えられた。

今後の課題としては、同一施設種の中での学びや体験の差異の検討を行うことがあげられる。同一の施設種であっても、施設によって実習の内容が異なる場合や同一の施設であっても配属クラス等によって実習内容が異なる場合がみられていた。そういった点を含めて詳細に検討を行うことにより、より実習の中での学びや体験について現実に即した理解が可能になるとと思われる。

また学生の事前学習での理解の程度や取り組みの内容等についても検討が必要である。本研究の結果より、事前の学習の内容が実習での体験や学びに影響を与える可能性が考えられた。よって学生が実際に事前学習の中で、どのようなことを理解し、どのような内容に取り組んだのかを把握した上で、実習での学びや体験について検討することによって、より具体的な事前指導のあり方に関して示唆が得られると考えられる。

における学生の学びの内容の分析、高等教育と学生支援：お茶の水女子大学教育機構紀要、4、54-61

石山貴章・安部孝・田中誠(2010)保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題(Ⅱ)―実習事後指導を通じた「自己評価」と「気づき」に関する分析から―、九州ルーテル学院大学紀要、40、59-72

松藤光生・中村恭子(2016)施設実習における実習施設種による学びの差異、中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要、48、65-71

松藤光生・中村恭子(2017)施設実習における実習施設種と実習先の決定方法による学びの差異、中村学園大学発達支援センター紀要、8、59-65

大和田明見・関根美保子・鈴木春江(2014)保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化、帝京大学教育学部紀要、2、275-284

多田内幸子・重永茂(2014)施設実習の前後での本学幼児教育学科学生の意識調査、久留米信愛女学院短期大学研究紀要、37、69-76

土谷由美子(2006)施設実習に関する意欲と現状についてⅡ―学生のアンケートを中心に―中国学園紀要、4、85-90

山口直範(2007)養護施設実習における短大生の心的発達効果、岡山短期大学紀要、30、79-82

引用文献

本間英治(2012)保育の質に関する保育士の意識の実態―A市内における保育士へのアンケート調査を通して―、保育学研究、50(2)、102-111

藤重育子(2014)保育実習における学びと課題―施設実習後の学生の振り返りから―、東邦学誌、43(2)、160-170

古川隆幸(2016)学生の社会的養護施設への関心と施設実習先決定過程に関する一考察―佐賀女子短期大学学生へのアンケート調査より―、佐女短研究紀要、50、109-113

池田幸代・田中謙・前嶋元(2013)保育者養成校の施設実習に